

---

# COLORs

ちやともん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

COLORS

### 【Nコード】

N6827M

### 【作者名】

ちやともん

### 【あらすじ】

ある世界に存在している数少ない学園。その中の一つに、一人の少年が入学してきた。少年が出会ったのは、赤茶の少年、空色の少女、深紅の少女、そして漆黒の少年。この四人こそ、学園で有名な少年少女たちであった。そして子供達は、それぞれに与えられた宿命に立ち向かっていく。

稚拙な文章ですが、暇があれば読んでみてください。

## 序章：世界の産ませし者

目をあけて

まわりを見回して

そして、自分を見た。

気付いたら、存在していた。

そして、自分の存在に気付いた。

何も覚えてない。

でも、なぜか不安はなかった。

こわいとは思わなかった。

今の自分が、自分なのだと思ったのだ。

過去の自分に、恐怖は感じなかった。

とりあえず、今のこの腹の減りをどうするのが第一だった。

朝。

板張りの、広い小屋のようなその空間に、ブンっブンっと、風を切る音が響く。

一定間隔で振り下ろされる木刀は、普通のものより重く作られている。

少年は、その腕の見た目からは思えないほど、軽々と木刀で素振りをしていた。

かなり長い時間やっていたのだが、少年は汗ひとつかいていなかった。

やがて、まだ薄暗かった空から日が頭をのぞかせ、辺りを照らしていく。

少年のいる空間にも、窓のような細かい木の隙間から優しい日の光りが走っていった。

その日が少年の顔にかかる、少年は眩しそうに目を細め、自分を突き刺す日差しを見上げた。

「……………」

暖かい日差しに、思わずフツと笑みを浮かべる。

音もなく、まるで時間が止まったかのようにだった。

と、そこで不意に声をかけられた。

扉の方を見ると、空色の髪をした少女が手を振っていた。

少年は返事をする、少女の方へ歩み寄った。





## 序章：高貴汚れし血

目の前で両親が殺された。

父は首を斬られて、母は心臓をひと突きにされて。

僕に向かい寄る影が大きくなった時、突然目の前が明るく染まった。

鋭く、それでいて暖かい光りが、僕を優しく包み込んだ。

その後の事はよく覚えていない。

気がついたら、僕はベッドに横たわっていた。

\*\*\*

視界に広がるのは、今まで内側からしか見たことのなかったはずの、  
壮大な建物。

まるで王族の住んでいるような城の形をしていて、大小様々な建物がその周囲を囲っている。

この城のような建物は、この世界に7つしかない学校である。

世界に散らばるように位置しているこの学校は、所謂魔法学校だ。10歳から19歳まで、最高10年間、一般教養から魔法の知識まで学ぶことができるため、大きな街と言っていいほどの人数が各地から集まってきた。

義務教育ではないが、かなりの遠方や辺境に住む者以外は、一番近くの学校に通うのが普通である。

通いの厳しい生徒のために学生寮も設置されているし、学校の周囲には勉強や実技に必要な道具、また、生活用品などを扱う店なども多い。

そのため“学園都市”と呼称されている。

学園都市の中央に佇む、一際大きい学校を目の前に、少年は翠の色をした大きな目を輝かせた。

「これが、今日からオレが通う、学校…」

そうつぶやきながら、少年は緊張した足どりで一歩を踏み出した。

## 赤茶色の少年

朝のホームルームの始まりを告げる鐘が鳴ってもガヤガヤとしていた教室は、正面側の扉が開かれると同時に鎮静化していった。

素早い足どりで教卓にたどり着いたこのクラスの担任は、扇型に広がって置かれている席に慌てて座りはじめた生徒たちをゆっくりと見回した。

このクラス担任の歳は30代で、この学校の男教師としてはかなり若い方である。

性格は穏やかだが、若いなりに熱血漢でもあり、授業内容も優秀なため、大半の生徒は彼を好いている。

男は全員が席につくのを見届けると、おはようと一言あいさつした。

「今日からこのクラスに生徒が一人加わります。入ってきて下さい」

担任が入ってきた扉の方を向く。  
そこから、一人の小柄な少年がそろそろと出てきた。

ガチガチに緊張しながらも担任の隣まで歩いた少年は、翠色の目をキョロキョロと動かした。

その中で、赤茶色の髪をした一人の少年と目が合う。  
1番後ろの席に座るその少年はウィンクしながらひらひらと手を振っている。

それを視界にとらえた少年は、安心した様子で改めて正面を向いた。  
精一杯の笑顔を浮かべて、大きな声で言った。

「スイ、です！これからよろしく、お願いします！」

勢いよく、礼をした。

クラスと言っても年齢や種族、入学した年はバラバラで、取る授業も必修科目以外は個々の自由である。

他の学校も違いはあるだろうが、同じようなものだ。

そのくらいの知識は前もって聞いていたスイであつたが、友達に言われた通り大人しく担任のカーズの説明を受けた。

「とまあ、こんなところですね。履修登録はいつでもいいですが、早めの方が正式に授業の出欠上よろしいですよ。とりあえずこの一週間、仮出席できますから」  
「分かりました。ありがとうございます」

頭を下げると、カーズはニッコリと笑って教室から出て行った。

クラス教室と言っても、皆それぞれとっている授業が違つので、連絡があつたり無かつたりする朝のホームルームや休憩室にしか使われない。

履修の説明を受けている間に、ほとんどの生徒は各自の授業に行つ

てしまった。

残っているのは自分を含め数人。

その内の一人　先程スイにウインクしてくれた、赤茶の髪色をした少年が近づいてきた。

「どう？説明分かった？」

「アイザックの言ってたことまんまだったからね。大丈夫」

「なら良かった。じゃあ、どうする？どこ行きたい？」

赤茶色の少年　アイザックは、穏やかに笑いながらスイに尋ねた。  
当たり前のように聞いてくるアイザックに、スイはキョトンと目を丸くした。

「アイザック、授業はいいの？じいちゃんに言われたからって、オレに付き合わなくてもいいぞ」

「あいにく、今日の僕の授業は午後だけなんだ。スイに付き合ってるのも僕の意志。だから、気にしないで」

「そっか：ありがと、アイザック！」

純粹で無邪気なその笑顔は、まるで汚れを知らない幼子のようにだっ



た。

そんなスイを連れ、アイザックは教室を出ていった。

## 空色の少女

アイザックはブラブラと歩き周りながら説明をしてくれるが、正直  
広すぎて覚えれる気が全くしない。  
最初は覚えようと試みたものの、途中で諦めた。

長い廊下を歩きながら、もし迷ってしまったらと想像して、少しゾ  
ツとした。

そんなことを考えながら、次に着いたのは図書室だった。

多くの本が、隙間なく並んでいた。

巨大な本棚の間にはちらほら椅子や机が置かれ、そこで生徒たちが  
読書したり勉強したりしている。

「すっげえー！いっぱい本があるぞー！」

「しいーっ！スイ、図書室では静かに…！」

感動して思わず叫んでしまったスイを、アイザックは小声で諫める。  
スイはこてんと首を傾げた。

「何で？」

「図書室は人が集中して本を読んだり勉強したりする場所なんだ。誰かが大声出したら、集中できないでしょ？」

「そっか、そっか。分かった」

納得したのか、首をブンブンと縦に振るスイ。

アイザックはニコツと笑い　そして、スイの後ろの椅子に座っていた少女に目を留めた。

「や、リコラス。授業無いんだっけ？」

アイザックが話し掛けた後ろの人物の方を、スイは振り返ってまじまじと見た。

晴れ渡った空のような色をしたスカイブルーの髪に、同じく澄んだ青い瞳。

肩までに切り揃えられていて、左だけちょこんと結ばれている。

「本当はあつただけだね。先生が授業前に準備してる途中、毒草に噛まれちゃったらしくて休講」。でもその代わりに課題出されちゃって」

「最悪」と眉間にシワを寄せる少女は、そこまで言って、ようやくスイを見た。

そんな少女に、スイは思わずドキッとしてしまった。

「私はリコラス。今日うちのクラスに入ってきた子だね。よろしく！」

「え、あ、うん…オレはスイ。よろしく、お願い、します」

スイはガチガチになりながらも、差し出された手を掴み、握手をした。

この学校は一般的な入学式というものはあるが、個人的な事情によってそれに間に合わない者も多く、後々に入学してくる者も少ない。

始めから入学出来ない者の損することと言ったら、人間関係が最初から授業を受けられないことくらいである。

とにかく、スイのようにこの時期の入学者というのは、珍しいことではない。

図書室を出た三人は、廊下をゆっくり歩いていった。

「課題つての出てるんだろ？大丈夫なのか？」

「調べ物は終わったし、後はまとめるだけだからね。帰ってからやるから、心配ご無用！」

「リコラスはこの授業割と得意らしいから、大丈夫だよ」

リコラスは先程まで持っていた資料の入っているカバンをパンパン叩いて、スイに親指を立ててグーサインをする。

アイザックの補足に「そうなんだ」と呟くスイは、何の授業なのかリコラスに聞いた。

「有毒植物のカード化Lv4」だよ。カード化の授業だから人気ないことはないんだけど、植物だしレベルも高い方だから、人そんなにいないよ」

「レベルって…」

「レベルは下が1から上が5まであつてね、私は4だから…中の上つてところ、かな」

「一般的に2か3まで取ればいいんだけど、もっと学びたいって人が4、5を取るんだ」

単位を取る毎にレベルアップするのだが、止めるのはいつでもいい。合わないと思う授業は直ぐに辞めてもいいのだ。

しかしその場合、授業の単位が取れない。

単位はイコールこの世界の資格のようなものなので、重要なのだ。

「カード化には専用の陣が書けなくちゃいけないから、スイはそこからだね」

「確かそれって一週間くらいで取れるよね。じゃあ、授業一個決定

」

「お、おう！」

勝手に進んでいく話に相槌をうつスイは、その授業の名前をメモした。

そうこうしている内に着いたのは、広いグラウンドだった。

## 深紅の少女

ドオオンっという音が、広いグラウンドに響いていた。

スイがその破壊音に顔を向けると、大きな人だかりができていた。

リコラスが何かに気付いたのか、「ああ、そっか」と両手をポンとたたいた。

「今日“カード使役実践Lv5”だったね。イーザがいる！」

「にしても人数多いなあ。Lv5取ってるのって10人ちょっとくらいじゃなかったっけ」

「16人だよ。他はギャラリー。Lv5はハイレベルだから、皆よく見に来てるんだよ。ていうか、観戦しに来てる」

「まあ、面白いつちゃ面白いだろうね」

「なあ、なあ！イーザって誰だ？全然話に着いてけないんだけど」

二人だけでどんどん盛り上がっていくのに、スイはストップをかける。

イーザという人のことはもちろん分らない。

完全に戸惑った様子のスイに、二人は「ごめんごめん」と謝る。



リコラスは人だかりの中心を指差した。

「あそこの、たぶん今戦ってるのがイーザ。雷系の使役ができる人  
つてこの学校じゃ限られてるの」

「雷と相性合う人は少ないんだよ。僕らもせいぜいLv2、3くらい」

「どうせ私はLv2よ！どうせ去年落ちたわよ！」

「リコラスは雷系との相性壊滅的だからね。Lv2が取れただけでもいいじゃないか」

アイザックがキャンキャンと吠えるリコラスを宥め、三人は人々の塊に歩み寄って行った。

人の間を掻き分け、無理矢理最前列までたどり着いた。

人だかりの中心にいたのは、学生二人に審判らしい教員一人だった。

学生二人は向かい合い、互いを睨んでいる　　と言っても、片方は余裕そうに口角をつりあげている。

アイザックは、その楽しそうに顔を歪ませた少女を指差した。

「あれがイーザだよ。あの悪役っぽそうなやつ」  
「だあれが悪役じゃあー!!!」

普通なら聞こえないような距離なのに、イーザと紹介された少女には完全に聞こえていたらしい。

授業そっちのけで、ずんずんとこちらに歩み寄って来る。

もともとツリ目だったイーザの目がさらにツリ目になり、血のように真っ赤な瞳がその恐怖を掻きたてた。

まさに、魔王。

魔王はアイザックの前でピタリと止まった。  
いつの間にか避難して板らしい観客たちがざわめいている。

スイとリコラスも若干アイザックから離れた。

「貴様、このアタシがあゝの距離で聞こえないと思ったか？」

「思っていないけど、聞こえても問題無いと思ったし！ 感じたまでを  
言っただよ」

「貴様そんなに殺されたいかあー！！」

そう叫ぶと同時に、イーザの右手がバチバチと放電した。

にも関わらず、アイザックはのんびりと指揮棒を振るうように指を  
動かす。

すると、アイザックの右手が一瞬光り、見るとそこには一枚のカー  
ドが握られていた。

アイザックがそつと呟く。

「ラ・デアラ　　ウォーリア」

「リボルド・アークス！！」

そして、歓声が響き渡った。

## 漆黒の少年

「二人は仲が悪いわけじゃないんだよ。じゃれあいが激しいだけでそれにお互いの实力を知ってるから、思い切りぶつかり合えるんだよ」

「じゃれあいつて言わないでよ、気持ち悪い」

「そうだぞリコラス。スイと言ったか…アタシはこの鉄錆頭がいちいち腹の立つ発言をするから攻撃するんだ。アタシは悪くない」

「事実を言ってるだけなんだけどね」

「黙れ潰されたいか」

アイザックの頭が叩かれる、スパンという良い音が廊下に響いた。イーザの物凄い存在感に、スイは上手く喋れないでいた。

そんなスイの様子に気付いたのか、リコラスがスイの手を引っ張った。

「イーザは良い人だよ。たまに怖いけどね　あ、ここで最後だよ」

一つの扉の前でリコラスは足を止めた。  
午前中いっぱい校内見学をしていたが、この目の前の扉で最後なよう  
うだ。

日も高いところまで上り、腹の減りがもうすぐ昼だと告げている。

「たぶんここには“あいつ”がいるはずだから、そしたら昼ご飯を  
食べに行こう」

“あいつ”…？」

アイザックの言葉に、リコラスとイーザは頷く。

しかし、一人スィだけは、“あいつ”という誰かを知らない。  
首を傾けた。

「ま、会ってからの楽しみ！すぐに仲良くなれると思うよ」  
「いいヤツだ。アタシも認めている」

リコラスに続いて、イーザは腕を組みながら遠くを眺めるような目  
で言った。

（そんなに、いい人なんだ）

その“あいつ”に興味を寄せながら、スイは扉に手をかけた。

（そんなに、周りの人に必要とされてる人…）

自分がふつと目を細めたことに、スイは気付いていない。

扉の取っ手を握る手に、無意識に力が籠った。

見た目より軽い扉を、スイはそつと開けた。

昼時に食堂が混まないわけではない。

そして、この学園は全校生徒だけでも街一つ分くらいの人数がいるのだ。

正直、こんなに簡単に席につけるとは思わなかった。

「この食堂、校内でも3番目に広いからね。席があいてない日はないんだ」

「それに校外の近くにもレストランやら定食屋やらがあるからな。そっちの方に流れる者もいるのだ」

アイザックの言う通り、かなり広い食堂だ。

3番目というので、おそらく1、2番目は途中で見た演習場と校庭だろう。

最後に見た武道場もかなりの広さだった。

板張りの清潔感ある空間で、神聖な空間のように思えた。

だが



「にしても、肝心な“あいつ”はどこに行ったんだろうねー」

「今日は確か“槍術”の授業があつたはずなんだけど…」

「だが、見たところ授業自体がすでにやってなかったように思われるぞ」

リコラスの言った初めて聞く“そうじゅつ”という単語が少し気になりつつ、スイはイーザの言い分に大きく頷いた。

武道場に入つたはいいが、肝心の“あいつ”という人物どこるか人っ子一人いなかった。

少し楽しみにしていたので、正直ガッカリだった。

「まあ、そんなに落ち込まないで」

「別に、そんな、落ち込んでなんかっ」

「いやいや、あからさまにガッカリしてたよ…」

図星をつかれたスイはムキになるが、リコラスはもちろん、他の二人にも簡単に分かった。

例の“あいつ”に会えなかった4人は、諦めて食堂に来ている。

いつもは例の“あいつ”と4人で食べていたらしいのだが、その代わりに自分がいることが少し申し訳なく思えた。

また少し落ち込み始めているスイを見ながら、その隣にいたアイザックはテーブルに肘をついた。

「もしかしたら、食堂で会えるかもしれないよ。いつつも昼はここで食べてるし、時間もこんくらいだしね」

「いたとしてもこの広さ。見つけれたら奇跡だな」

「ちよつと、イーザっ」

「何だやるのか、この前の決着つけようか？」

「あぁいいとも、やってやろうじゃ」

「すとーっぷー！え、何でそうなっちゃうの！？」

いつの間にか勝手に騒がしくなっていく友人たち。

スイはどうすることもできずただ客観することにした。

実は腹がかなり減っているのだが、いまいち仕組みが分からない。そのため、3人が落ち着いてくれるのをじっと待つ。

が、早々に力尽き、額をテーブルに乗せた。

俯いているので何も見えないが、3人の騒がしい声はやたらと耳に入ってきた。

よく聞いてみると、話がかなり飛躍しているような…

すると突然、ぽんつと肩に手を置かれた。

声は何とか上げなかったものの、思わず肩が震えた。

「大丈夫か？」

「お、おう… あ…」

重い頭をゆっくり上げて、最初に視界に入ってきたのは、夕闇のよ  
うな漆黒の髪であった。

この世界で、黒目黒髪というのはどの種族においても珍しい。そのことをスイは知らないが、初めて見るその色にただ感嘆していた。

「ったく、騒がしいやつらだな。…昼飯、食ったのか？」

「……………」

「おーい」

「……………」

「……………、えっ、何？」

「…あっ、ごめっ」

無意識のうちに、その黒い髪に触れていた。

スイは伸ばした手を慌てて引っ込め、すぐに謝った。

少年は恥ずかしさに俯くスイを見て、穏やかに微笑んだ。

「いい、気にすんな。珍しいかな、こんな色。初対面で髪触られ

たのは初めてだけど」

「いや、その、本当悪かったって。初めて見る色だったから」

「おもしろいな、お前！…俺はカイヤ。カイでいい。お前は？」

少年　カイヤは、手を前に突き出した。

スィはそれを見て、その手を握った。

カイヤの漆黒の瞳を、その翠の瞳で見つめた。

「オレは、スィ。今日、この学園の生徒になったんだ。よろしく！」

「ああ、よろしくな」

握り合う手に、しっかりと力がこもった。

その後ろでは、3人の男女が未だに言い争っていた。

\*\*\*

「で、今に至ってた」  
「…大変そうだったな」

スィは今までの経路を話ながら、昼食の乗ったお盆を持って席に戻っていた。

3人があまりにも長く言い争うので、昼食を取りに行く途中だったカイヤと一緒にいくことにした。  
3人は全く気付いていなかった。

「あいつらもひでえなあ。新入生ほったらかすなんて」  
「本当、助かったよカイヤ」  
「…ま、俺が原因みたいなものだし…」

カイヤがぼそつと何かを言った気がしたが、空耳かと思い、特に何も言わなかった。

歩く間に、武道場で会えなかった例の“あいつ”に思いを馳せる。

今はカイヤがいるから、不満は全くない。  
でも、例の“あいつ”がどんな人物なのか、単純に気になった。

「見てみたいなー」

「それって、例の“あいつ”？」

「うん。なんかこう、もやもやしてる」

「特徴とか聞いてないのか？」

「会ってからの楽しみだーって、教えてくんないんだ！…あ、力  
イヤ知ってたりする？あいつらと仲いいヤツ」

むくれているスィに尋ねられ、カイヤは困ったように笑った。

「た、たぶん」

「まじかつ！？な、な！教えてくれよ！」

「そいつってたぶん」

「あー、カイ！！」

カイヤの言葉を遮って、進行方向からカイヤの名を呼ぶ声が上がった。

見ると、リコラスがこちらを指差していた。  
正確に言えば、カイヤを。

「え、知り合いだったのか！？」

「知り合いつていうか…」

アイザックとイーザを席に置いて、リコラスが小走りで駆け寄った。カイヤは頬をポリポリかきながら、リコラスが近寄るのを眺めている。

「例の“あいつ”って、俺のことだよ」

「、え…？」

「お前が知りたがっていたのは、俺のことだ」

「カ・イ・ヤー…！」

突っ込んできそうな勢いだったが、ギリギリのところで踏み止まった。

カイヤと同じくらいの身長なのに、下から覗き込むような体制なので上目遣いだった。

「まったく、どこ行つてたのよー。今日って“槍術”じゃなかったっけ？」

「午前中は軍に呼び出されてるから、今日は午後に変更。午後だったらいつでもいいって」

「今日ってカイ、“ダガー”もなかったっけ？大丈夫なの？」



「“ダガー”は人数少ないからすぐ終わるし、“槍術”も時間は決まってる。被んねーよ」

「いや、私は体力的な方をね……あ、スイ」

取り残されたスイは、啞然としていた。

それを見つけたリコラスは、今度はスイの方に向き直った。

「彼、カイヤ！噂の“あいつ”……あれ、もう知り合ってた？」

どうやら、聞き間違えではなかったようだ。

## カード

この世界には魔法というものがあり、そして、全ての生き物に魔力が宿っている。

しかし、人間は魔獣や魔物、エルフや魔族に比べると、魔力は極端に低い。

加えて、人間自体が放てる魔法はあまり威力がない。

人間は非力である。

しかし、人間には他にはない頭脳がある。

人間は足りない力を補うため、頭を使った。

そして、カードを生み出した。

カードは魔力の低い、人間だけの技術である。

もちろん他のものもやろうと思えばできるのだが、できる頭脳を持つのが人間だけなのだ。

カード化は相手の魔力が人間より高い必要がある。

と言っても、人間より魔力が小さいものは無いに等しい。

そのため、人間をカード化することは不可能である。

そしてカード化するには、自分専用の陣が必要であり、それを空中に魔力で描くとカード化が可能となる。

カード化は少し時間がかかり相手は抵抗ができるので、ある程度相手が弱ってからカード化するのが通常である。

カードの使役には、2種類の道がある。

一つは、持っているカード化されたものの特性や魔法の使役である。

これは、陣の出し、自分専用のコードを唱えると使える。

もう一つは、カード化したものの自体の召喚である。

これは、陣とコードに加えて、カード化したものの名前を呼ぶ必要がある。

名前は一般名刺でもいいのだが、名付けるのが一般的なので名付けた名前を呼ぶ者が多い。

どちらも使役者の魔力を使うので、カードの力もあるが、魔力次第で強くも弱くもなる。

魔力は潜在的なところが大きいが、増量は可能だ。それは、魔力を使うこと。

そのため、生徒は日々勉強や実践練習に励んでいる。

## 見に行こうよ

昼食を摂った5人は少しの間話をしていたが、午後の授業を控えたアイザックとイーザが食堂で別れた。

今は残った三人で廊下を歩いていた。

「じゃあまだ履修する授業決めてないのか」  
「うん。てか、何があるかもまだよく分かんないんだよねー」  
「そういや、担任に一覧表とか貰わなかったのか？」

スィは頷く。

カイヤは呆れたようにため息をついた。

「あの野郎、忘れやがったな…まあ、いいや。とりあえず、俺の授業見学するか？」

「え、いいのか!？」

「基本、履修しなくても学ぶことはできるんだ。ただそれだと正式じゃないから、単位は取れないけどな」

どうせ今日入学してきたスイは、最初から授業を登録してないため、単位を取れるものが限られる。短期なのは、ほとんどが初心者用の授業なのだ。

「俺の受けてる実践系の授業はまだできないけど、参考にはなるだろ」

「えーと、カイのこれからの授業って何だっけ？」

“ダガー”だよ。スイ、行ってみなよ！」

リコラスの言葉に、スイは元気よく頷いた。

武器などとは見たことはあるものの、使ったことはない。初めての経験に、心が躍る。

「そうか、じゃあ今から行くか」  
「おう！」

スイは拳を突き上げた。



“ダガー”

図書館に忘れ物をしたりコラスと別れた二人は、すぐに演習場に行くことにした。

“ダガー”の授業は食堂から少し離れた演習場で行われている。

演習場は校内に複数有り、その中でも“ダガー”の演習場は小さい方であった。

小さいと言っても、軽く100人以上は入れそうではあるが。

演習場に入ると、そこにはすでに何人が生徒がいた。

「本当は武器とか体術の授業にも、たいていの授業と同じでレベルがあるんだ。でもレベルの高いヤツを参考にするために、全員一緒にやるんだ」

「へえ、じゃあオレはL V 1からかあ…カイは“ダガー”得意なのか？」

「んー…」



少し間をとって、カイヤは答えた。

「ダガー自体は嫌いじゃないんだけど、得意ってわけじゃないな。軽いし小回りがきくから、スイに合うかもな」

実際に見てみて決めな、とカイヤは続けた。

そこで、扉が大きな音をたてて、乱暴に開かれた。

驚きでスイの肩は大きく揺れ、対しカイヤは慣れているのか、全く動じずにただ扉の方を見ていた。

いつの間にか増えていた生徒たちも、スイのような驚きは見せない。

注目される中入ってきたのは、ひよろ長い蛇のような男だった。

男は何事もなかったかのように、生徒たちの中を突き進んで行く。ある程度まで進んで、突然止まった。

「さあさあ、始めようか!!」

大きく手をたたいて、大声でそう叫んだ。

あまりの音量にスイは眉間にシワをよせ、両手で耳を塞いでいた。

他の生徒も何人が耳を塞いでいるが、カイヤを含めほぼ全員が全く動じていない。

もはや、慣れっこなようだ。

「“ダガー”のセバイユ先生。他に“歴史”の授業も担当しているんだ」

「声でけえな…」

「おかげで、“歴史”は未だ寝ているヤツはいないぜ」

だろうな、とスイは頷いた。

「それじゃあ今日も、実践訓練！！Lv1の子は型を覚えてずいぶん慣れてきたようだし、一緒にやってみよう！！」

セバイユは楽しそうにそう叫ぶと、生徒たちをレベルごとに分けた。

スイはとりあえず、カイヤの近くにすることにした。

カイヤがいるところの生徒は、他のレベルの集団より少なかったが、もともと全体の人数が少ないため、そこまで目立たなかった。

セバイユはその細長い体をくねらせ歩きながら、二人組を作るように言ってまわっていた。

そして、どんどんこちらに近づいてくる。

「や、皆おまたせ！！君らは普通の訓練慣れてるだろうし、今日はペアになった人とチームになって、二対二をしようか！！」

「えー、マジかよー」

「この人数で二対二とか、時間的に絶対リュウジンと当たるじゃないか」

「先に組んだもん勝ちだな」

聞き慣れない人名があったが、とりあえず周囲の生徒はその人との対戦がとてつもなく嫌なようだ。

隣にいるカイヤも嫌なのだろうかと思い見てみると、特に変わった様子はない。

「カイは、他の皆が言ってるヤツのこと、怖くねーのか？」

「ん？別に、怖くないけど…あ、先生」

「え…うわっ!？」

振り返ると、スイの後ろにはセバイユが不気味に立っていた。セバイユの高い背は、小柄なスイを見下ろすには簡単な程だった。

スイは思わず声を上げていた。

その反応を見たセバイユは、不機嫌に口を膨らませた。  
ハッキリ言って、気持ち悪い。

「そんなに驚かないでよ、失礼しちゃうな〜!!」

「す、すみません…」

「それよりキミ、見たことないな〜!!この授業とってた!?!?ていうか、さすがにこのレベルの生徒は覚えてるんだけどなあ!!」

「コイツ、今日入ってきたばっかで」

「ま、いいや!!じゃあカイヤくんと組みなさい!!カイヤくんと仲良さそうだし!!」

カイヤの説明を遮って勝手に話を進めるセバイユに、二人は呆然とする。

反論しようにも、セバイユはさっさと行ってしまっていた。

二人は互いに顔を見合わせて、ため息をついた。

実践訓練が始まった。

配給されたダガーは皆同じサイズで、初めて武器を持ったスイは、それを少し重く感じた。

突然決まったことだが、スイは少しワクワクしていた。

それを横から見ていたカイヤは、ダガーを器用に回しながらフツと笑う。

「楽しそうだな」

「分かる？」

「見るからにな。おもつきし顔に出てる」

「…こついうの、初めてだからさ。怖いってのもあるけど、それ以上を楽しみだ！」

「初めてが、このレベルかあ…ま、俺がカバーするから、テキトーにやってみ」

スイは大きく頷いて、カイヤの前に出た。

相手は二人とも青年で、カイヤよりもずっと背が高い。  
片方はスキンヘッドで体格がよい。

相手の二人組はスイの行動を警戒して、お互い間隔をあけている。

そこで、やっとセバイユの合図がかかった。

「さあ、始めー！ー！ー！」

それと同時に、皆が一斉に動き出した。

スイは、雄叫びを上げながら、相手方に突っ込んでいった。

ダガーを横一文字に振るが、簡単にかわされてしまう。

横に避けたスキンヘッドを追いかけるように、スイは第二撃をくりだした。

今度はダガーを突くように前に出す。

だがそれも刃を逸らすように流され、バランスを崩したスイは床に倒れ込んでしまう。

スキンヘッドはそれを見て、馬鹿にするかのように笑った。

「アイツと組んでるからどんなヤツかと思ったが…お前、全くの素人じゃねえか！ビビらせやがって」

倒れたスイを踏み付けようと、男が足を振り上げた。

容赦なく落とされるその足を、スイは何とか転がり避ける。そして、そのまま立ち上がった。

「はは、猿みてーな野郎だな！おらっ」

使い慣れているのか、ダガーを器用に振る。

体に似合わず細かく操られるダガーは、スイがギリギリ避けられるように風をきる。

スイが逃げるのを楽しんでいるのだ。

「最初の勢いはどうした、ガキ！！」



「くっ…そお…！」

スイはただの初心者で、特別な力があるわけではない。

ましてや、ダガーどころか武器自体初めて持つスイに、勝つ術は無いと言っても過言ではない。

そして、ダガーを避けたスイは、とうとう足を躓かせてしまった。

尻をついて転んだところを、足でさらに仰向けに押し倒された。  
ダガーを持つてゐる方の肩を勢いよく踏み付けられたスイは、背中を  
したたかに打ち、咳込む。

その際、持っていたダガーを遠くに弾かれてしまった。

「どうやら終わりみたいだなあ。へへ、楽しかったぜ」

「う…このやろっ」

「お前にや俺様をどうこうすることあてできねえよ！安心しな、この  
ダガーは訓練用だから切っても傷はできねーようになってる。まあ

…」

男のダガーがスイの左腕を狙った。

「痛みはあるけどな！」

「うああっ！」

左腕にかつてないほどの激痛が走り、スイは悲鳴をあげた。

その心にはすでに最初の好奇心はなく、恐怖だけが支配していた。歯を食いしばって、泣きそうになりながら痛みに耐える。

それがまた楽しいのか、男はニヤニヤと顔を歪ませた。

「俺の相方がアイツを足止めしている間に、ゆっくりいたぶってやるよ」

男が再びダガーを振りかぶるところを見て、スイはグッと目をつむった。

\*\*\*

「セバイユせんせ！」

「？おや、リコラスちゃんじゃないか！！久しぶり！！」

「相変わらずの音量で……」

耳に響くセバイユの声に若干顔をしかめつつ、できるだけ微笑む。

そんなリコラスの背を、嬉しそうにバンバンと叩いた。

「リコラスちゃんは“ダガーLv3”でやめちゃったもんねー！！  
Lv4、挑戦しないの！？」

「うーん、私ダガー合ってなかったみたいで…今はカード系の方を中心に授業を取ってます」

「まあ、リコラスちゃん女の子だしね！！それに噂だと、リコラスちゃんはカード系の成績が特に優秀らしいし！！」

「いいいえ、イーザには負けますよ。…あ、そういえば、スイはどうしてます？」

スイと一緒に授業見学でもしていようかと思っていたが、近くにスイの姿はない。

しかし、知っているだろうセバイユに聞いたものの、返答は思っていたものと違っていた。

「え、スイって!？」

「…スイですよー!見学で来てたでしょ、カイと」

「カイヤくと!？え、知らないな〜!!…あ、そういえばカイヤくんの連れらしいのがいた気が!」

「そ、それだよそれ!ていうか、先生が知らないってことは、どこ行っただの…?」

と、そこでリコラスの目に映ったのは、スキンヘッドの男に踏み付けられているスイの姿だった。

「ス、スイ!？」

「え、何、見学者だったあの子!!?」

「あのスキンヘッド、アラガンじゃん!何でスイがあんな危ないヤツと戦ってるの!？」

やつと真実を知ったセバイユが、どうしようも顔を曇らせた。

「アラガンくんは自分より弱い相手をいたぶる趣味があるから、見学者なんて素人、ひとたまりもない…!!」

「早く助けないと、せんせ…あ」

アラガンが、再びダガーを振りかぶった。

リコラスは、思わず目をつむってしまった。

スイもリコラスもそつと目を開けると、想像してたのとは違つ展開が広がっていた。

そして、それはアラガンにとつても。

「素人いたぶつて、そんなに楽しいかよ、アラガン」  
「り、《リュウジン》…!!」

スイとアラガンの間に入って、振り下ろされた刃を腕に受け止めていたのは、黒髪の少年だった。

スイは大きく目を見開いて、ゆっくりと少年の 友達の名を読んだ。

「カイ、ヤ…!」  
「ごめんな、スイ。足止めくらつてたんだ」

本当に申し訳なさそうに謝るカイヤに、スイは首をブンブンと横に振る。

小さな声で、何度もありがとうと呟いた。

そんなスイの頭を、カイヤはそつと撫でた。

「そんな…！ざ、ザックはどうした…！」

「あの反則野郎？あんなの、魔法使ったって俺には勝てねーよ」

「あ、あいつは呪<sup>しゅ</sup>を使っただけ…！てめえ潰すために習得したのに  
っ  
っ」

「あれ呪だったのか。どうりでなかなか足止められるわけだ」

「っ、くっそおおっ…！」

カイヤの腕に刺さったダガーの刃を引き抜くと、アラガンは狂ったように飛び掛かってきた。

カイヤは全く動じないで、アラガンのダガーを持っていた自分のダガーで簡単に受け止めた。

体格差を感じさせないどころか、カイヤ優勢のように見える。

そして、その目に間違いはなかったらしい。



「ぐあぁっ!!」

刃を受け止めてからのカイヤの動きは、川の流れるように無駄なく滑らかだった。

その動きに、スイはアラガンへの恐怖も忘れ、つい見惚れてしまっていた。

いつの間にかアラガンの背後に回り込んでいたカイヤは、ダガーを振り上げた。

「スイの借り、返してもらっぜ」

柄の部分で、アラガンの頭を勢いよく殴った。

## 《黒の龍神》

スイのケガは軽い打撲で済んだ。

しかし、アラガンのした行為が、スイのトラウマを生んだ。

スイは、気を失い倒れているアラガンにすら、恐怖を感じるようになってしまったのだ。

もう少し詳しく言つと、アラガンという存在そのものに。

カイヤの戦う姿に見惚れている間はアラガンへの恐怖を忘れることができたのだが、ケガを診てもらっているうちに、恐怖が振り返してきた。

「本当、ごめんな、スイ」

カイヤはスイのサポートをしようと思っていた。

先に行ってしまったスイの後ろでアラガンにダガーを放ち、そこで出来るだろう隙を攻撃させようと思っていた。

しかし、スイの後ろについた瞬間、その間にアラガンとペアを組ん

でいたザックという青年が割り込んできたのだ。

それだけなら、全く問題はない。

カイヤなら、本気を出すまでもなく、彼を倒すことが可能だからだ。

ただ、今日のザックは違っていた。

ダガー以外の力どころか、厄介なことに呪を放ってきたのだ。

呪はくらうまでどんな力を持っているか分からないし、一度くらうてしまうと解呪する必要がある。

解呪とは文字通り、呪を解くことで、解呪しなければ、呪は体に残り、侵食していく。

そして、一般に解呪には時間がかかる。

だからこそ、呪は避ける必要があった。

「ザックが呪を使うなんて、全く考えてなかった。油断してた。だから、助けに行くのが遅れたんだ……だから、ごめん」

俯いているスィに、カイヤは頭を深く下げた。

それに気付いたスィは、慌てカイヤの顔を上げさせた。

「ち、違うよ、カイ！ー！お、オレが勝手に仕掛けたんだし、オレが

悪いんだって!!」

「いや、初心者なの知ってて前に行かせたんだ。どうにかできると思っていた、俺の慢心が生んだ結果」

「違うよおおー!!!!」

今までで一番大きな声で言葉を遮られ、さすがのカイヤも耳を塞いだ。

塞ぎ遅れたスイは、頭がぐわんぐわんと揺れるのをどうしようも出来なかった。

「ワタシのせいだよ、カイヤくん!!ワタシが無理に授業に参加させたから!!!しかも、Lv5の生徒と!!」

正確にはLv5の授業を受けているのだから、まだLv4だが、強いことには違いない。

セバイユは、ただの見学者であつたはずの少年を、レベルの高い者特にアラガンと戦わせてしまったことを、本当に申し訳なく思っていた。

「あの二人には、後できつつい罰則を与えるからね!!」

そつ叫びながら手を振るセバイユを背に、三人は演習場を出ていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6827m/>

---

COLORs

2010年10月15日23時59分発行